日本と英語圏の旅行案内書からみた 東京の観光名所の空間分析

鈴木 晃 志 郎* 若 林 芳 樹*

Spatial Analysis of Tourist Attractions Listed in Japanese and English Guidebooks to Tokyo

Koshiro SUZUKI* and Yoshiki WAKABAYASHI*

Abstract

Geographers have made a variety of studies using guidebooks to clarify the meaning and distribution of tourist sites in cities. Nevertheless, few studies quantitatively examine the spatial distribution of tourism sites in detail. In addition, little is known about differences among attractions in terms of the cultural backgrounds of tourists. Hence, this study made a spatial analysis of tourist attractions described in guidebooks written for Japanese and English-speaking readers. Applying kernel density estimation and raster operation method with GIS, this study clarifies that tourism attractions in guidebooks differ between Japanese and Anglophone countries. English guidebooks recommend readers to visit not only cultural sites (*e.g.*, historic places, museums, and theatres) but also sites for nightlife (*e.g.*, bars and taverns). In contrast, Japanese guidebooks show less interest in these types of attraction, and tend to focus more on shopping and eating. The spatial distribution of the tourism attractions also indicates some differences between Japanese and Anglophone guidebooks. Specifically, the spatial extent of tourist attractions in English guidebooks is smaller than that in Japanese guidebooks, being located close to railway stations along Yamanote Line. English guidebooks are also characterized by tourist sites for nightlife, centering on the Roppongi district. Thus, attractions listed in guidebooks are regarded as a reflection of the interests and behavior patterns of tourists.

Key words : tourist attractions, guidebook, kernel density estimation, raster operation, cross-cultural comparison, Tokyo

キーワード : 観光名所, 旅行案内書, カーネル密度推定, ラスタ演算, 異文化比較, 東京

I. はじめに

1980年代後半の円高をきっかけにして、日本人の海外旅行者は急増したのに対し、訪日外国人旅行者は伸び悩んでいた。こうした日本の国際

観光にみられる不均衡を解消するため、日本政府は2003年から官民一体となって観光立国をめざすビジット・ジャパン・キャンペーンを開始した。その結果、訪日外国人旅行者数は順調に増加し、目標とする年間1千万人に近づきつつある

* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科

* Graduate School of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan University

(国土交通省, 2006)。しかし、外国からの旅行者を増やすためには、受け入れ態勢の整備だけでなく、外国人からみた日本の観光地の魅力や外国人の観光行動の特徴を的確に把握する必要がある。そのために、訪日外国人旅行者に質問紙調査を実施した国際観光振興機構(2005)のような例もあるが、限られた質問項目から観光地に対する意識や行動を詳しく知るのは困難である。そこで本研究は、日本と外国の旅行案内書の内容を比較しながら、旅行者の文化的背景による観光名所(tourist attractions)¹⁾の違いを明らかにすることを試みる。

これまでに旅行案内書を用いた地理学的研究は少なくないが、大別すると、旅行案内書の内容分析を通じて、空間に付与された意味を読み解こうとする研究(たとえば、Del Casino Jr. and Hanna, 2000; Siegenthaler, 2002)と、旅行案内書に掲載された名所の空間的分布と記述内容との関係を検討した研究(たとえば、Lew, 1991; 滝波, 1995; 木築, 1996; 今野ほか, 2002)に分けられる。本研究は、後者の研究の流れに位置づけられる。

これらの研究のうち、Lew (1991) はシンガポール中心部を記述した複数の案内書を類型化し、類型ごとにとりあげられる名所の比率や分布域が異なることを指摘した。一方、滝波(1995)はパリを対象にして旅行案内書ギド・ブルーに含まれるイメージ要素を類型化し、地区ごとのイメージ要素の出現頻度を通してツーリズム空間の特徴を検討している。これにならって、木築(1996)は観光地「長崎」のイメージとその変遷について旅行案内書を用いた検討を行った。この研究で明らかになったのは、同じ地域を描いた案内書でも時代によって採用される名所や記述の仕方が変化することである。そうした変化に焦点を当てた研究として、江戸期から2000年までの東京の名所の変遷をガイドブックを用いて明らかにした高槻(2004)、大正期から昭和20年代までに日光地域を描いた日本と外国の観光ガイドブックの記述を通して、観光スタイルや価値観の変化を捉えた今野ほか(2002)などの事例がある。

旅行案内書を用いたこれらの地理学的な研究では、掲載された名所の空間的分布を単位地区に集計して分析することも多かった。しかし、個々の名所の所在地がわかっているならば、GIS(地理情報システム)の解析機能を用いて、より詳細な分布傾向を定量的に把握することができる。そこで本研究は、日本で最も多くの外国人旅行者が訪れる東京を事例にして、異なる国で出版された旅行案内書の掲載地点をGISで空間分析し、そこに現れた日本人と外国人の観光行動の違いを考察する。

II. 研究の方法

ここでとりあげるのは、Suzuki and Wakabayashi (2005) が旅行案内書にみられる空間記述の異文化比較で使用したのと同じ、日本と英語圏の旅行案内書である。本研究では、東京について記述した日本の案内書と英語圏の案内書をそれぞれ3冊ずつとりあげた²⁾。これらは、書店で容易に入手できる、英語圏と日本の代表的な旅行案内書のシリーズのうち、対象地域の東京に関する豊富な記述を含んでいるという理由で選択した。

観光名所の分布傾向を把握するために、各旅行案内書に掲載された東京都内の観光資源や観光施設をすべて抽出し、住所の情報をもとにCSIS(東京大学空間情報科学研究センター)の「CSVアドレスマッチングサービス」を用いて経緯度情報を取得した。マッチングが上手くいかない地点、および案内書の住所データが不完全である地点については、インターネットを通じて該当する地点を検索し、そこに記された住所情報を取得した。その結果、日本の案内書では全1,609地点中1,588地点、英語圏の案内書は全1,229地点中1,200地点がジオコーディングされ、掲載地点全体の99.9%が分析対象となった。

これらの観光名所を分類するために、本研究ではHall and Page (2002)、岡本(2001)、淡野(2004)などの既往の研究を参考にして、独自の分類基準を作成した。個々の名所の分類に際しては、旅行案内書中の各掲載地点の解説等を参照した。その結果、観光名所は表1のような大分類・中分類・小分類に分けられた。同じ東京を対象に

表 1 観光名所の分類と出現頻度.

Table 1 Types of tourist attraction and their relative frequency.

大分類	中分類	小分類	日本 (%)	英語圏 (%)	差	
宿泊施設	宿泊施設	ホテル	11.5	15.9	-4.4	
		旅館	0.3	2.0	-1.6	
		その他	0.3	0.0	0.3	
		(小計)	12.1	17.8	-5.7	
飲食施設	酒場	ライブハウスなど	3.9	5.1	-1.2	
		洋風の酒場	2.9	9.4	-6.6	
		居酒屋	1.4	1.5	0.0	
		(小計)	8.2	16.0	-7.8	
	レストラン	和食	10.4	12.7	-2.3	
		洋食	12.0	8.4	3.6	
		エスニック料理	3.0	5.5	-2.4	
		中華料理	1.8	1.6	0.2	
		喫茶	2.5	0.8	1.7	
		(小計)	29.8	29.0	0.8	
	その他飲食	洋菓子・食品	5.8	3.9	1.9	
		和菓子・食品	3.5	0.1	3.4	
		フルーツバーラー	0.2	0.0	0.2	
		食材店	0.7	0.4	0.3	
		(小計)	10.3	4.4	5.9	
	遊覧施設	観賞型観覧施設	旧跡	1.6	1.8	-0.2
			寺社	2.7	3.0	-0.3
			構造物	0.6	0.7	-0.1
			官公庁	0.5	1.0	-0.5
和劇場			1.1	1.4	-0.3	
洋劇場			0.6	1.1	-0.6	
美術館			2.3	4.0	-1.7	
博物館			3.4	4.3	-0.9	
(小計)			12.7	17.2	-4.6	
娯楽型観覧施設		遊園地	2.5	1.4	1.2	
		水族館	0.6	0.2	0.4	
		映画館	0.4	0.5	-0.1	
		図書館	0.5	0.0	0.5	
		動物園、植物園	0.3	0.2	0.1	
		(小計)	4.3	2.2	2.1	
商業施設		複合施設	2.9	2.9	-0.1	
		商業ビル	1.4	1.5	-0.2	
		雑貨	8.2	2.3	5.9	
		服飾	3.4	1.1	2.4	
		書店	1.4	1.1	0.3	
		電器店	0.3	0.8	-0.5	
		(小計)	17.5	9.7	7.8	
保養施設		浴場	0.3	0.2	0.1	
		緑地	1.3	1.5	-0.2	
		公園	2.1	0.7	1.3	
		山、滝、鍾乳洞	0.6	0.1	0.5	
		(小計)	4.2	2.6	1.6	
その他		競馬場	0.1	0.2	0.0	
		スポーツ施設	0.5	0.8	-0.3	
		学校	0.1	0.0	0.1	
		交通施設	0.2	0.1	0.1	
		美容・理容	0.1	0.0	0.1	
		(小計)	0.9	1.1	-0.1	
合計			100.0	100.0	-	
(サンプル数)			1609	1229	-	

して名所の変化を分析した高槻（2004）の研究では、寺社や史跡に代わって施設の占める割合の増加が指摘されており、表1でもその傾向が読み取れる。ジオコーディングされた名所の分布の分析には、ESRI社のArcGIS 9.0を使用した。ここで使用するデータでは、複数の案内書に登場する名所も少なくないが、これを点記号のドットで表示すると、名所が重なった区域の密度が過小評価されてしまう恐れがある。また、ドットのままでは観光名所の分布パターンを比較する際、分布図相互の定量的比較が困難である。グリッドなどの単位地区に分割して点データを集計し、ポリゴンデータとして処理する方法もあるが、単位地区のサイズや設定の仕方によって結果が異なることは、可変単位地区問題（MAUP）として知られている（貞広, 2003）。

こうした問題を回避するために、本研究ではカーネル密度推定法（中谷, 2004, 54-57）を用いて、離散的な点の分布を連続的な曲面に変換して分布傾向を捉える。名所の分布密度の推定値にラスタ演算を適用して差を求めれば、日本と英語圏の観光名所の分布の相違を定量的に分析することができる³⁾。

III. 観光名所の種類別構成比

旅行案内書で紹介された各名所が、全体の中でどれだけの比率を占めているのかを、日本と英語圏の間で比較したのが表1である。ここで、「差」の欄は、各分類項目が掲載情報全体に占める比率を日本と英語圏で比較した値であり、マイナスは英語圏側で、プラスは日本側で、それぞれ比率が高いことを意味する。

これをみると、宿泊施設の比率で英語圏の方が高いのは、日帰り客も含まれる日本の旅行者とは違って、外国人には宿泊場所が旅行の重要な要素となるためであろう。一方、飲食施設については、菓子や軽食を提供するその他の飲食施設で日本が上回るのに対し、英語圏の案内書は酒場で日本を上回っている。バーや居酒屋などを含む酒場が夜型の名所とすれば、その他の飲食施設は昼型の名所といえる。このことから、英語圏の案内書

は夜間の観光行動も重視しているといえるだろう。

遊覧施設については、美術観賞や観劇など比較的教養色の強い鑑賞型観覧施設の占める割合が英語圏で高いのに対し、日本側は服飾や雑貨品などの商業施設、および遊園地などの娯楽型観覧施設の比率が高い。英語圏の比率が日本のそれを上回るのは、商業施設の中では電器店、飲食施設では日本料理などに限られる。このことから、東京は日本の旅行者にとって買物や娯楽の情報提供が重視されているのに対し、英語圏の旅行者には文化的な名所に重きをおいた情報提供がなされているといえる。

IV. 観光名所の空間的分布

1) 全体的傾向

まず日本と英語圏の案内書に登場するすべての名所の分布について、標準偏差楕円を用いて比較したのが図1である。この図における楕円の面積は、日本が91.9 km²、英語圏が46.5 km²となり、日本の案内書の方が名所は広域に分布していることがわかる。これは標準偏差楕円の形状にも現れており、いずれも東西に扁平なほぼ相似形の楕円で、日本の方が英語圏のそれより一回り大きい。分布の平均中心は、日本の案内書の方がやや南側にあるが、これは英語圏の案内書に比べて臨海部の名所も比較的多く収録されているためであろう。

また、鉄道駅（地下鉄、モノレール等を含む）からの距離を比較するために、パッファ解析によって駅から500 m以内に立地する名所の割合を求めると、日本が94.8%に対して英語圏は98.6%と、英語圏の案内書の方が駅に近接した名所を多く掲載していることがわかる。本研究と同じ旅行案内書にみられる道案内情報の記述様式を比較したSuzuki and Wakabayashi（2005）は、日本の案内書が地図や写真を多用して言語的記述を補っているのに対し、英語圏の場合はもっぱら言語に頼るという記述スタイルの違いを見いだした。こうした違いの一因は、住居表示システムの相違に関係していると思われる。街区方式をとる日本の住居表示は外国人にはなじみにくいであろ

図 1 旅行案内書に現れた名所の分布と標準偏差楕円.

Fig. 1 Spatial distributions of tourist attractions listed in guidebooks and their standard deviational ellipses.

う。駅に近接した名所が多いのは、そうした不慣れた土地での行動に一定の配慮がなされた結果かもしれない。

図 1 では名所の分布の詳しい傾向は読み取りにくい。そこで前述のカーネル密度推定法（検索半径 1 km，出力セルサイズ 200 m）を用いて、日本と英語圏それぞれについて分布密度を求めたのが図 2a, b である。ここで、検索半径を 1 km としたのは、平成 10（1998）年東京都市圏パーソントリップ調査結果による徒歩の平均トリップ時間（13.1 分）に基づいて、時速 4 km と仮定した徒歩の平均トリップ長が約 1 km となるためである。つまり、名所間の回遊行動も 1 km の範囲内で行われると考え、これを検索半径に用いた。したがって、得られる密度局面は単なる名所の分布というよりも観光客の潜在的訪問先を表している。また、出力セルサイズは、データのサイズと密度曲面のなめらかさを勘案して 200 m とした。

こうして得られた分布の差を、密度推定値のラスタ演算によって求めたのが図 2c である。この図では、日本の案内書の名所密度から英語圏の案内書のそれを引いた値を示し、値が高い（明るい）部分ほど日本の案内書が、低い（暗い）部分は英語圏の案内書の密度が高いことを表す。これらの図をもとに、名所の分布を詳しくみると、英語圏の案内書に登場する名所が JR 山手線周辺とその内部に偏在しているのに対し、日本の案内書では山手線から外れたところにある、吉祥寺、自由が丘、下北沢といった若者や女性に人気の盛り場にも名所が多いところが特徴的である。これらの地区が英語圏の案内書に登場しない理由として、日本の伝統文化に接することのできる観光資源が乏しいことが考えられる。

また、お台場や月島・晴海など臨海部に位置する比較的新しい名所も、英語圏の案内所にはほとんど現れない。これは、前述の若者・女性向けの

図2 カーネル密度推定による日本と英語圏の旅行案内書に現れた名所の分布。
 (a) 日本の案内書の名所密度。
 (b) 英語圏の案内書の名所密度。
 (c) 日本と英語圏の案内書の名所分布密度の差。

Fig. 2 Kernel density estimation surface for spatial distributions of tourist attractions listed in Japanese and English guidebooks.
 (a) Density estimation surface for tourist attractions in Japanese guidebooks.
 (b) Density estimation surface for tourist attractions in English guidebooks.
 (c) Differences in kernel density estimation surfaces for tourist attractions between Japanese and English guidebooks.

盛り場と同様に、異国情緒に欠けること、観光名所として知られるようになって日が浅いことなどが原因と考えられる。

2) 名所の種類別にみた分布傾向

前章の分析から、東京の観光名所については、買物・娯楽施設を指向する日本の案内書と、文化的・教養的要素を重視する英語圏の案内書との違いが比較的明瞭にみられた。ここでは、そうし

た観光名所の偏りが名所の空間的分布にどのように現れるかを、GISを用いて分析してみたい。

とりあげる観光名所は、表1において日本と英語圏の差が比較的大きかった、宿泊施設、酒場、その他飲食、鑑賞型観覧施設、商業施設である。これらの観光名所について、前述のようにカーネル密度推定を行った後、ラスタ演算によって分布密度の差を求めたのが図3である。ここで

(a)

(b)

(c)

図 3

Fig. 3

図 3 観光名所の種類別分布の密度推定結果。
(左：英語圏，右：日本－英語圏の差分)
(a) 宿泊施設。
(b) 酒場。
(c) その他飲食施設。
(d) 鑑賞型観覧施設。
(e) 商業施設。

Fig. 3 Kernel density estimation surfaces for tourist attractions in guidebooks.
(Left: English guidebooks, Right: Difference between Japanese and English guidebooks)
(a) Accommodations.
(b) Bars and taverns.
(c) Other places for dining or buying foods.
(d) Historical/cultural sites.
(e) Commercial establishments.

は、紙幅を節約するために、日本の案内書の密度は省略し、代わりに日本と英語圏の密度の差を右側の図で示している。

英語圏の案内書に比較的多い宿泊施設 (図 3a)

は、皇居を取り巻く都心部と山手線の主要駅の周囲に塊状に分布する。日本との差を求めた右側の図では、値のレンジが約 10 と比較的小さいことがわかる。ただ、日本側の方がやや分布範囲が広

く、山手線の外側にまで広がっている。

同じく英語圏の案内書に多い酒場（図 3b）の分布密度をみると、新宿や銀座以外に、六本木・青山・渋谷にかけて带状に高密度地区が現れる。これは、この周辺に大使館や外資系企業が多く、外国人向けの宿泊施設や飲食店が集中していることと関係している。差を求めた右側の図でも、この一帯で英語圏の名所が卓越することが確認され、全体的に値のレンジはきわめて大きい。ただし、吉祥寺、下北沢、自由が丘といった若者向けの盛り場では、日本の案内書にとりあげられた名所の多さが顕著である。

菓子や軽食を提供する店が含まれる「その他飲食施設」（図 3c）も、酒場と類似した分布傾向がみられるものの、浅草・上野方面にも高密度地区が広がっているところが特徴的である。これは神社・仏閣などの観覧施設も多い上野や浅草には、伝統的な和菓子を扱う店も多く集まっており、日本文化を味わうのに適した場所として外国人にとっても重要な名所であることを表している。ただし、この種の施設は、英語圏の掲載割合が低いいため、差を求めた右側の図では全体的に日本の名所密度の方が高い地区が卓越する。

東京のアーバン・ツーリズムにとって重要な観光資源といえる鑑賞型観覧施設（図 3d）は、著名な史跡や伝統的建造物が多い下町の上野・浅草から皇居を取り巻く都心部、および博物館や劇場が集まる新宿・渋谷の副都心周辺に多く分布する。こうした文化的施設は英語圏の方が掲載件数は多いため、差を求めた右の図では、値のレンジが 20 近くに開いて全体的にマイナスの値が卓越する。

最後に、英語圏の案内書に掲載された商業施設（図 3e）は、銀座、新宿、渋谷、池袋、上野といった都心・副都心の商業集積地に多く分布するほか、外国人向けの店が多い青山・六本木付近にもやや高い地区がみられる。日本との差を求めた右側の図では、値のレンジが 7 前後と小さく、日本と英語圏での違いは比較的小さい。ただ、全体的に日本の案内書で比率が高いため、密度の差が正の値をとる地区が多くなっている。

V. 考察：名所の空間的分布と旅行者の行動

前章までの分析は、旅行案内書で想定されている旅行者の意識や行動様式に、日本と英語圏とで違いがあることを示唆している。そこで、日本を訪れる旅行者の意識・行動を知るうえでの数少ない資料である、国際観光振興機構（2005）が行った訪日外国人調査結果を用いて、本研究の結果の妥当性を検討する。この調査では、2003 年 11～12 月と 2004 年 2 月に日本の国際空港で出国前の外国人旅行者（滞在期間 2 日～6 ヶ月）を対象に行われた質問紙調査に基づいている。サンプル数は 4,829 人で、結果は主要な国別に集計されている。

このうち、英語圏の中で最も多いアメリカ合衆国からの旅行者に関する結果を分析対象とする。ただし、ひとくちに外国人旅行者といっても、アジア人と欧米人とは旅行のスタイルや嗜好に大きな違いがある（吉住, 2004）。そこで、比較のために、最も多い訪日旅行者を送り出している韓国についての結果も併せてとりあげる。

まず、日本を訪問した動機（観光目的の旅行者のみの回答）をみると、アメリカ合衆国の旅行者の場合、日本人の生活の見聞・体験（43.6%）、日本訪問への憧れ（32.2%）、日本食（28.9%）、歴史・町並み・建造物（26.8%）、の順で多い。これは韓国人旅行者でも類似した結果となっており、景観や食事を含めた日本の文化に対する関心が旅行の動機の中で重要な部分を占めていることがわかる。とくに日本食は世界的にも人気が高まっているが、本研究でとりあげた旅行案内書に登場する名所のうち、最も大きな割合を占めるレストランの中にあって、和食の店は 4 割以上を占め、日本のそれよりも比重が大きい（表 1 参照）。

こうした旅行動機は、訪問した場所にも反映されている。国別・男女別に東京都内での訪問先を集計した表 2 をみると、銀座や新宿などの盛り場のほか、浅草・上野・皇居など、日本の文化や伝統に接することのできる場所への訪問の割合が高い。これは、とくに英語圏の案内書において、

表 2 男女別・国籍別にみた東京都内の訪問先。

Table 2 Places visited in Tokyo by gender and nationality.

順位	韓国				アメリカ合衆国			
	男性	%	女性	%	男性	%	女性	%
1	新宿	23.9	新宿	29.8	その他東京	27.6	その他東京	35.7
2	その他東京	22.3	その他東京	23.5	新宿	19.1	銀座	19.5
3	銀座	7.7	渋谷	14.1	銀座	17.4	新宿	17.6
4	渋谷	7.6	原宿	13.6	六本木	12.5	浅草	16.7
5	上野	7.1	お台場	13.6	浅草	9.9	皇居	14.0
6	浅草	5.5	上野	11.9	品川	8.3	六本木	14.0
7	お台場	5.2	浅草	10.1	皇居	7.3	上野	10.4
8	原宿	4.7	銀座	8.1	赤坂	6.9	渋谷	9.0
9	品川	4.6	池袋	6.3	渋谷	6.1	原宿	7.2
10	秋葉原	4.5	六本木	6.3	上野	5.6	東京タワー	6.8

国際観光振興機構 (2005) に基づき作成。

寺社や博物館・劇場などの鑑賞型観覧施設が上野・浅草から皇居周辺にかけて多く分布していたことと符合する。それはまた、日本の伝統・文化への関心が高い外国人旅行者の特徴を表している。

表 2 でアメリカ人と韓国人の旅行者を比較すると、アメリカ人の場合、前述の主要な名所のほかに六本木を訪れる割合が高いのが特徴的である。これに対し、韓国人については、お台場など臨海部の名所が上位を占めるのが目を引く⁴⁾。これは、台湾や中国など他のアジア諸国からの旅行者にも共通しており、吉住 (2004) が指摘した欧米からの旅行者との観光のスタイルや嗜好の違いを表している。

六本木に対するアメリカ人の関心が高いことは、本研究の分析結果にも現れており、六本木付近の名所は日本の案内書よりも英語圏の案内書に登場する頻度が高かった。とくに、英語圏の案内書で「After dark」や「Nightlife」といったカテゴリーが設けられている点は、日本の案内書とのきわだった違いをなしている。このように、外国人向けの酒場や飲食店が多い六本木付近は、英語圏の旅行者にとってナイトライフを楽しむ場として関心が向けられている。

以上のように、英語圏の旅行案内書に現れた観

光名所の特徴は、訪日旅行者の調査結果とも符合するものであった。これは、旅行者の行動の選択肢を提供するという旅行案内書の役割からみて当然のことであるが、同じ旅行者が案内書に掲載されたすべての名所を訪問するわけでもない。旅行者の動機や行動様式にはさまざまなタイプがあり、そのタイプによって訪問先やそこでの行動も異なることは良く知られている (若林, 2002)。また、旅行案内書によって想定する旅行者のタイプに違いがみられるため、案内書別に比較すれば名所の分布にも違いが現れるかもしれない。さらに、アジア諸国の旅行案内書と比較すれば、英語圏とは違った傾向がみられる可能性もある。これらの点についての検討は、今後の課題としたい。

VI. おわりに

本研究は、東京を対象とした日本と英語圏の旅行案内書を取りあげ、掲載された観光名所の分布パターンからみた観光行動の違いを比較した。その結果、全体的に日本より英語圏の案内書の方が掲載地点の分布範囲は狭く、鉄道駅への近接性も高かった。これは、なじみの薄い外国人旅行者にとっての名所が空間的に絞り込まれていて、公共交通機関でのアクセスが容易な範囲に集中していることを意味する。ただし、これが東京に特有

の傾向なのか一般的なもののかは、他都市との比較を行ってみなければわからない。

日本と英語圏の案内書に掲載された名所の空間的分布を比較したところ、英語圏の案内書の特徴として、文化的観光資源が豊富な上野・浅草から皇居付近にかけてと、外国人向けの盛り場である六本木付近の名所の登場する頻度が高いことがわかった。これは、英語圏の旅行者に特徴的な、日本の伝統・文化に対する関心と、ナイトライフも重視する観光のスタイルを反映している。

ところで、東京を対象とした旅行案内書の内容分析としては、都心商業地の活性化の条件を探るために行われた岡田・中井(2003)の研究がある。1991年と2001年の二時点で日本の案内書に含まれる掲載地点を類型化して変化を検討すると、1991年には大規模商業施設と寺社仏閣が最も高い集客効果を示していたのに対し、2001年には飲食施設がとって代わったことが明らかになっている。本研究で得られた知見も、日本の案内書に関しては彼らの分析結果を支持している。

しかしながら、英語圏の案内書については、岡田・中井(2003)の見解とはやや異なり、神社仏閣等の観覧施設のウェイトも比較的高かった。こうした結果が文化の差によるのか、それとも国内旅行と外国旅行の違いによるのかは、改めて検討する余地がある。

いずれにしても、ここで得られた知見は、冒頭で述べた訪日外国人誘致策を考える際の一つの材料になることは間違いない。とくに、多様な観光資源が含まれ、さまざまな目的で多数の国から旅行者が訪れる大都市のツーリズム空間を検討するには、旅行者の社会的・文化的背景を考慮することが重要である。そうした外国人旅行者の行動様式や観光地に対する意識を捉える際に、旅行案内書が一つの手がかりを与えることは、本研究からも明らかである。一方、GISの応用という面からみた場合、観光分野ではGPSやICタグを活用した観光案内やナビゲーション、Web GISによる観光情報の提供など、地理情報技術の実践的利用が進んできている。しかし、観光研究にGISを導入した成果はまだ乏しいのが現状であ

る。本研究は、観光資源・施設の立地分析や観光客の行動分析などにも、GISが幅広く応用できる可能性があることを示し得たのではないかと考える。

注

- 1) 観光の対象は、観光資源と観光施設とに分けられる(岡本, 2001, p.186)が、アーバン・ツーリズムの場合、地元住民も旅行者と同じ観光資源や施設を利用する可能性が高く(ピアス, 2001, p.414)、観光施設が観光資源を兼ねることも少なくない。そのため、両者を区別するのは難しいと考え、本研究では一括して観光名所として扱うことにした。
- 2) 日本の旅行案内書には、るるぶ社(2000): JTBのポケットガイド 15. JTB出版、大日本印刷 CDC 事業部(2000): エアリアマップ旅王国 12. 昭文社、ブルーガイドニッポン編集部(1999): ブルーガイドニッポン編集部 10. 実業之日本社を、英語圏の旅行案内書には、Cashion, D.S. (2000): Forder's updated edition Japan. Fodor's Travel Publications, Reiber, B. (1998): Frommer's Tokyo. Macmillan, Rowthorn, C. and Taylor, C. (1998): Lonely Planet Tokyo. Lonely Planet Publications をそれぞれ採用した。
- 3) こうした処理は、複数のデータから得られた密度間の差や比を求めるデュアル・カーネル(Dual kernel)という方法に相当する。推定された密度は比尺度であり、標準化は行っていない。また、密度がゼロの区域も含まれるため、比を求めるのは難しい。そこで、差を求めるのが適当と判断した。
- 4) 訪日外国人旅行者調査によると、臨海部の名所としてはTDR(東京ディズニーリゾート)も、韓国をはじめとするアジア諸国からの旅行者の主要な訪問先に挙がっているが、英語圏からの旅行者が訪れる頻度は少ない。本研究の分析では、対象を東京都内に絞ったため、もともとTDRはデータに含まれていない。

文 献

- Del Casino Jr., V.J. and Hanna, S.P. (2000): Representations and identities in tourism map spaces. *Progress in Human Geography*, **24**, 23-46.
- Hall, C.M. and Page, S.J. (2002): *The Geography of Tourism and Recreation 2nd ed.* Routledge, New York.
- 木築隆之(1996): 観光地「長崎」におけるイメージの変容. 大分地理, **10**, 29-38.
- 国土交通省(2006): 平成18年版観光白書. 国立印刷局.
- 国際観光振興機構(2005): 2003-2004 訪日外国人旅行者調査. (財)国際観光サービスセンター.
- 今野理文・十代田朗・羽生冬佳(2002): 観光ガイドブックにみる観光地アピールポイントの変遷. 観光研究, **14**(1), 9-16.
- Lew, A.A. (1991): Place representation in tourist guidebooks. *Singapore Journal of Tropical Geogra-*

- phy, **12**, 124-137.
- 中谷友樹 (2004): GIS と疾病地図. 中谷友樹・谷村晋・二瓶直子・堀越洋一編著: 保健医療のための GIS. 古今書院, 34-73.
- 岡田祐介・中井検裕 (2003): 都市観光から見た都心商業地の発展条件に関する研究—東京 23 区を対象とした観光ガイドブックおよびレストランガイドを用いた分析—. 都市計画論文集, **38**, 583-588.
- 岡本伸之編 (2001): 観光学入門. 有斐閣.
- ピアス, D. 著, 内藤嘉昭訳 (2001): 現代観光地理学. 明石書店. Pearce, D. (1995): *Tourism Today* (2nd. Ed.). Longman.
- 貞広幸雄 (2003): 可変単位地区問題. 杉浦芳夫編: シリーズ人文地理学 3 地理空間分析. 朝倉書店, 48-60.
- Siegenthaler, P. (2002): Hiroshima and Nagasaki in Japanese guidebooks. *Annals of Tourism Research*, **29**, 1111-1137.
- Suzuki, K. and Wakabayashi, Y. (2005): Cultural differences of spatial descriptions in tourist guidebooks. in *Spatial Cognition IV* edited by Freksa, C., Knauff, M., Krieg-Brückner, B., Nebel, B. and Bar-kowsky, T., Springer-Verlag, 147-164.
- 高槻幸枝 (2004): ガイドブックにみる「名所」の変遷—1830 年代の江戸から 2000 年の東京まで—. お茶の水地理, **44**, 43-54.
- 滝波章弘 (1995): ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述—雰囲気とモニュメントの対比—. 地理学評論, **68A**, 145-167.
- 淡野明彦 (2004): アーバンツーリズム—都市観光論—. 古今書院.
- 若林芳樹 (2002): トルコの海浜リゾート地・アンタリヤにおける外国人観光客の行動パターン. 金沢大学文学部地理学報告, **10**, 147-156.
- 吉住和子 (2004): 外国人観光客に喜ばれる観光スポットと接遇に関する調査と考察—通訳ガイドの現場からの報告—. 日本観光学会誌, **44**, 73-82.

(2007 年 9 月 6 日受付, 2008 年 1 月 15 日受理)